



大阪プロバスクラブ

会報 第390号

2024年3月13日発行

Monthly Bulletin of

The Probus Club of Osaka

例会会場：ホテルモントレ大阪 06-6458-7111
 例会日：2022年7月より毎月第2水曜日 12時～14時
 ○創立2001（平成13）年7月9日創立記念式7月16日
 ○スポンサークラブ：箕面千里中央ロータリークラブ
 ○友好クラブ：箕面ロータリークラブ
 ○会長：山下恵司 ○幹事：川端崇且 Tel：090-2702-7212
 ○事務局：（幹事宅）〒562-0044 箕面市半町2-5-23
 ○会報担当：西宮富夫 pxi06603@nifty.com
 ○大阪プロバスクラブ会報：<http://osakapurob.exblog.jp/>
 ○全日本プロバス協議会：<https://www.all-japan-probus.com/>
 （R4年11月の第10回総会で決定された新体制）
 会長 田中信昭、幹事長 一瀬 明、会計 飯田富美子
 ○日本のプロバスクラブ・関西 Blog 版：
<http://probuscent.exblog.jp/>

R6年2月初旬～R6年3月初旬までの更新分（順不同）

クラブ	会報	記事一部
旭川	会報第223号	【新春例会】、今津市長新年アイサツ、「春の海」山田雅宏さん夫妻の演奏、新年会ゲーム「宝引き」、ハッピーボックス、他
東京八王子	プロバスだより第339号	持田会長挨拶、戯笑歌（ぎしょうか）、シニアダンディーズの新年事業・令和6年八王子市「二十歳を祝う会」出演（レポーター杉山友一）、他
姫路南（二水会）	会報第121号	12月例会報告、1月例会報告、会員の新年の一言・抱負（13名）、「日本弱体化」長谷川一彦、『私の幸福論』（福田恒存著）坪田一夫、他
神戸北	6年3月例会案内	卓話「老いの名句・シルバー川柳」、「ひとこと：ゴルフは認知症予防になる・・・」監崎章会員、他
大阪	会報第389号	出席会員近況報告（一部）、「私の生活の基本形は縄文人と同じ」西宮富夫会員、「箱根・伊豆長岡・熱海へ行ってきた」田中浩三会員、「12月パリへ行ってきた」伊丹谷五郎会員、他
北九州	月報6年2月号 NO.212	プロバスクラブ恒例新年会、同好会活動報告（歴史文学講座、食美会、歌をうたう会、日本酒の会）、ミニ随筆「ピンピンコロリ」N083 松本忠、他

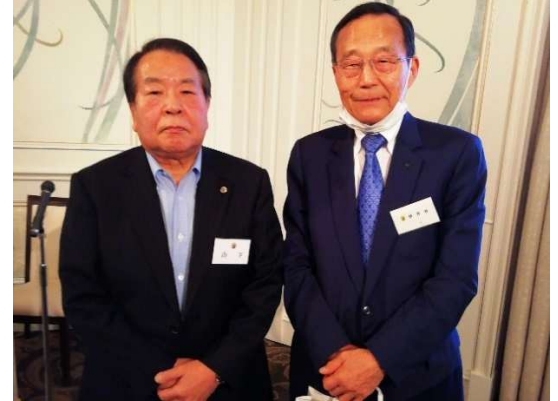
●『春の小川』 作詞：高野辰之 作曲：岡野貞一

春の小川は さらさらゆくよ
 岸のすみれや れんげの花に
 すがたやさしく 色うつくしく
 咲けよ咲けよと ささやきながら

前回 第390回 通常例会 2024年2月14日（水）
 会場：ホテルモントレ大阪 12：00～14：00

◎通常例会

- 司会進行：野村尚子会員
- ソング：吉川栄子会員 ●『冬景色』
- 誕生月会員：（右）2月伊丹谷五郎会員（左山下会長）



●食事タイム 乾杯：西宮富夫会員

ワイン：アリアニコプーリア ポッジョ・レ・ヴォルピ
 Aglianico Puglia Poggio Le Volpi



（ワインラベル）

（生産地プーリア州）

生産者：ポッジョ・レ・ヴォルピ

（Tuscany イタリアワイン専門店 interview より）1970年代にアルマンド・メルジェ氏により設立されたワイナリー「ポッジョ・レ・ヴォルピ」はローマ郊外の丘陵地帯（中略）にあり、この地にキツネがよく現れていたことから、「ポッジョ・レ・ヴォルピ（キツネの丘）」と名付けられています。1990年代にプーリア州のポテンシャルを見出し、90年代後半にプーリアへ進出。

生産地：イタリア プーリア州

（Wikipedia）プーリアはしばしばブーツに喩えられるイタリアの「かかと」に当たる地域。肥沃な平原が広がる地形で、古くから穀倉地帯として知られた。古代にはギリシア人が植民都市を築き、次いでローマ人がこの地を征服してアッピア街道を延伸した。古代ギリシア人がもたらしたブドウ品種アリアニコ種はプーリア州など南イタリアで栽培されている。世界遺産の街アルベロベッロがこの州の有名な観光地。

今回 第391回 通常例会 2024年3月13日（水）

会場：ホテルモントレ大阪 12：00～14：00

- 大阪プロバスの歌（作詞：渡辺 孟 補詩：田村徳郎）
- ① プロバスクラブへ集まろう 気の合う仲間とお昼時
元気に歌おう会の歌 第二の人生また楽し
 - ② プロバスクラブに集まって 優しく気軽に話そうよ
見せたい自慢の得意技 遊びのプランもまた楽し
 - ③ プロバスクラブに集まれば 高まる奉仕の心意気
世界に広がる和の願い 明日も愉快地に生き抜こう

○山下恵司会長挨拶：今年8月の全日本プロバス協議会第11回総会・五所川原大会には阪急交通社のご努力で無事6名参加できるようになりました。

○幹事報告：次回理事会は例会30分前に開催とのこと。

○出席報告：担当委員長より会員13名・ゲスト2名計15名との報告あり。

○OH-BOX：担当委員長より10名25,000円との報告あり。

★山下恵司会員：富谷さん、宜しく。

★川端崇且会員：富谷様、尾崎様ようこそ。

★伊丹谷五郎会員：急用が出来、途中退席します。大変申し訳ないです。

★吉田州伸（くにのぶ）会員：小春日よりの天気です。元気でこれからも頑張ります。

★西宮富夫会員：富谷さま卓話よろしくお願ひします。

★宮田鐵夫会員：久しぶりの例会、よろしくお願ひいたします。

★田中浩三会員：余寒お見舞い申し上げます。（ハッピーバレンタイン）

★笠松幸一会員：春が近くなってきました。もうすぐ桜の花ですね。

★野村尚子会員：尾崎様、富谷様ようこそお越しくささいました。

★浅山紀久子会員：富谷教授をお迎えしての例会、ご講演楽しみにしています。ありがとうございました。又、例会においでください。

◎卓話：国号「日本」の成立とその呼称

京都大学名誉教授富谷至（トミヤイタル）氏

（会報担当：富谷様より原稿をいただき、そのまま使用しておりますが、各段落にタイトルがなかったので文中の文言を選び、各段落のタイトルとした。また関係する天皇の画像を挿入した。）

(1) 聖徳太子の国書「日の出る所」

我々の住んでいる「日本」という国名が、いつ、どのような意味をもって出てきたのか、「日本人」であれば、当然知っておかねばならないこのことからは、小学校から大学までの教育の現場で、はっきりととりあげ説明されていません。その理由は、国号「日本」の成立にかんして、日本史研究において定説に至っていないことによります。



富谷至京都大学名誉教授

西暦600年に派遣された聖徳太子による遣隋使が隋の皇帝に向けて出した国書に、「日出る所の天子、日の没する所の天子に書を奉る、恙無きや」とあり、「日本」の国号のそれが始まりとの説がありますが、この場合の「日の出る所」とは、東方という意味で、「日の没する所」とは、西方という意味です。つまり「東の天子が、西の天子に書を送る」ということではありませぬ。

またこの時に国号「日本」が成立していたのなら、聖徳太子の国書にはそれが書かれているでしょうし、その時代（推古天皇の時代）の資料に、「日本」という国号が確認されるはずですが、それも存在しません。

聖徳太子

（皇太子在位：
593年～622年）

（聖徳太子勝鬘
経講讀図より）

画像引用元：
Wikipedia



(2) 遣唐使、「倭国」という国号を「日本」に変更したことを伝える

「日本」という国号が登場する以前、日本列島の住人は「倭人」と呼ばれ、彼らが形成する国邑（それは、われわれの感覚でいう「国」ではなく、村落のようなものであり、「国邑」と歴史上では呼称されている）を「倭国」という名前を中国王朝では付けていました。

当時の中国の王朝は漢王朝ですが、この「倭」という語は、「柔順」「素直」という意味で「中華に柔順な夷狄の国」であり、それは「朝貢国」とも呼ばれます。

以後、3世紀の邪馬台国の時代、5世紀の倭の五王の時代でも「倭」という呼称は続きます。おそらく聖徳太子の時代にあっても変わらなかったと思われる。

第42代

文武天皇

（在位697年
～707年）

画像引用元：
Wikipedia



文武天皇大宝2年（702）、第8次の遣唐使が派遣されます。その長（執節使）は粟田真人でしたが、この遣唐使は、630年から始まる遣唐使のなかでも、特別な使節であったといえます。なにが特別なのか、まず日本で初めての元号である「大宝」が制定されたこと、これは天皇のもとで、固有の、つまり中国の皇帝の影響を受けずに時を支配するという意味がそこに込められています。さらに大宝元年には、新しい法律である大宝律令が発布されました。つまり、日本の新しい国制がここに成立したのです。

それを中国にも伝えるのが、大宝二年の遣唐使の使命であったのです。そして今一つの重要なこと、それがこれまで、中国に柔順な意味で「倭国」と呼ばれていた国号を「日本」と変更することを当時の唐王朝に宣言することでした。「日本」という名称は、日が出現する所、という意味で、すでに漢語の普通名詞であったのですが、それを倭にかわる名称として採用したのです。

(3) 飛鳥浄御原令で「倭」から「日本」に国号変更

中国側にこの新しい国号を伝えたのが、702年でしたが、新たな国号がその時に急に決められたということは、考えられません。日本の国内でその名称の採用を決め、それを法制化して、そして中国に伝える、これがこ

との経過であったといえます。では、どのような経緯がそれまでにあったのか。

日本史で取り挙げられている663年の白村江の戦い、これは660年に唐が百済を滅ぼし、百済の王子が亡国復興のために日本の援助をうけて白村江で戦い、日本の船団が壊滅した事件です。

その時の天皇は天智天皇ですが、唐が攻めてくることを恐れて、九州一帯の守りを固め、また都を大津京に遷都(667年)します。天智の死後、勃発するのが、672年に天智天皇の後継をめぐる弟・大海人皇子と息子・大友皇子が戦った壬申の乱で、勝利した大海人皇子(天武天皇)は、天智朝を脱皮した新しい国家を目指すこととなります。新しい国家の創成は、藤原京(676年着工

694年に完成)と**682年制定の飛鳥浄御原令**ですが、それは中国との関係を絶って独立した国家であり、その一環として屈辱的な「倭」から「日本」へと国号を変更したと考えられるのです。「御宇日本天皇」の称号、それは大宝令が準拠した浄御原令に明記されていたのではないでしょう。



第40代
天武天皇

(在位 673
年~683
年)

画像引用元:
Wikipedia

(4) 日本(やまと)から日本(にほん)という発音に

第八次遣唐使が帰国する時に、使節の一員であった山上億良が詠んだ和歌が万葉集に載っています。

「山上億良の大唐に在りし時、本郷を憶いて作りし歌」(第八次遣唐使)

去来 子ども 早く日本へ 大伴の御津の浜松
待恋ひぬらん 『万葉集』(63)

国号日本を唐に伝え役目を終えたことが、その歌意に読み込まれていますが、ここの「日本」を「にほん」と読むべきだという説があります。しかし、それは同意できません。「日本」という国名は「倭」に変わる文字表記であり、発音呼称ではやはり「ヤマト」であり、それは奈良の「大和」と同じ呼称であった、否、都の発音呼称が同時に国の呼称ともなっていた、それは「倭」の呼称が「ヤマト」であったことの延長線上にあります。

やがて「ヤマト」が「ニホン」との発音に変わっていきます。『日本書紀』は、720年に成立しますが、はじめは「やまとふみ」と呼ばれていましたが、それが「にほんしょき」と今日の呼称になります。794年に成立の『続日本紀』は、「しよくにほんぎ」との発音です。また、『紫式部日記』(1010年成立)には、紫式部が「日本紀」に造詣が深いと一条天皇が言ったので、「日本紀の御局」とのあだ名をつけられたと自慢げに怒ったふりをしてることが記されています

日本(やまと)から日本(にほん)という発音に移行

したのは、8世紀から9世紀(奈良時代末期から平安時代初期にかけて)と考えられるのです。ではどうして「日本」が「ヤマト」から「ニホン」に変わっていったのでしょうか。

一つの理由は、中国の書籍舶来の増加と漢文の普及、訓読の成立です。中国の漢籍は、遣唐使が始まった7世紀から舶来していましたが、8世紀の中旬に、さらにその数が増え、また漢籍を読むことが増えてきました。それまでは、漢文で書かれた文章を黙読することが普通だったのですが、師弟の教育のための漢文素読が行われ、我々が今日、漢文を読む方法である訓読がこのころから始まります。その場合、漢籍のなかで見られる「日夕」「日中」「日月」「日夜」「日景」などの熟語は音読みされ、その影響で「日本」も「ニチホン」と音読みするのが一般となっていったといえます。

今一つは、奈良の都である大和(やまと)つまり平城京が8世紀後半には、恭仁京(740年)に遷都され、また平城京に(745年)、さらに長岡京に(784年)、最後には794年に、平安京に移ったことです。この遷徙は、都ヤマトとヤマト国の結びつきを弱めていきます。平安都人は「日本」をヤマトと呼ばなくなるのです。

以上のことから、8世紀後半には、「ニホン」という呼称が一般となったというのが、私の推論です。

(5) 「ニホン」と「ニッポン」

いま、我々は「日本」を「ニホン」ともいい、また「ニッポン」とも発音しています。どちらが古く、また二つはどう使い分けがなされてきたのでしょうか。

結論を先に言うと、「ニホン」という呼称は先にあったと考えられます。

奈良時代、末尾が「フ・ク・ツ・チ・キ」で終わる漢字音、例えば、立(リツ)月(ゲツ)屋(オク)日(ニチ)納(ナフ)などですが、これらの漢字音の末尾のフ・ク・ツ・チ・キが、他の文字にかぶさる熟語のばあいには、声音が消えてしまうという読み癖、読み方となる(すべてそうではありません)という現象がありました。その代表は、「日記」で、これは「ニキ」と発音されました。「ニツキ」の「ツ」が消えて「ニキ」となるのです。また納言も「ナフゴン」ではなく「ナゴン」と呼称されています。平安文学の『土佐日記』『紫式部日記』などの日記は、すべて「ニキ」と写本では仮名で書かれ、もしくはルビが振られています。「日本」も同じく、「ニチホン」であるのが「ニホン」と発音されたと言えます。

一方の「ニッポン」ですが、これは、琵琶法師の語りを記録した語り本系『平家物語』の写本では、「日本一」を「にっぽんいち」と仮名で表記しています。『平家物語』は語り本系の他に読み本の『平家物語』がありますが、そこでは「日本一」を「にほんいち」と発音しているのです。降って、室町時代になっての謡曲においても、たとえば「実盛」のなかで「にっぽんいち」という表記が確認されます。「ニッポン」という発音は、語り物、謡曲といった聴覚にうったえる場合、そのように発音され、抑揚、強調などの効果を意識したと考えられます。明治時代に出版された高橋龍雄『国定読本 発音辞典』(同文館1904)には、「ニホン」「ニッポン」の二つが

挙げられ、次のような場合にそれぞれの発音となるとあります。

- ・にっぽん：「日本銀行」「日本軍」「日本刀」「日本丸」
- ・にほん：「日本紙」「日本中」「日本赤十字」

「日本」および「日本」の二字をふくむ語彙に莊嚴、重厚、雄大などの意味を期待する時には「ニホン」が「ニッポン」と発音される場合が多い、それは語り物、謡といった聴衆を意識した音声言語による文学、芸能に水脈を求めることができる、私はこのように考えています。

以上

◎本居宣長の『古事記序』註解の紹介（西宮会員）

（会報担当：国号を漢字「日本」と定める等、漢学を好み、漢字が普及していった頃の出来事の一つが古事記の完成なので、この編集経過を説明する「序の一部」（本居宣長の註解）を卓話に関連して追記した。）



本居宣長
44才
自画自賛像
(1773年)

画像引用元：
Wikipedia

（以下、WEBサイト「雲の筏」本居宣長古事記傳二之巻「序文の解」現代語訳より抜粋引用）

（古事記）の序は、本文とは大変違っており漢籍に似せて甚だしく飾り立てた文だ。（中略）そして漢文調に文を飾ったからその心も自然に漢意となり「混元既凝」「陰陽斯開」といった語句が多い。（中略）しかし当時あれほど漢学を盛んに好まれた世であったからといって、誰にでもこの序の文のようなものを書けたらどうか。

（中略）本文と序を比べて、ここにこういう言葉があるのは逆に古伝（本文）においては、全くそういう概念がなかったことの証拠であって、正実と文飾の違いはますますはっきりする。これを見ても、大御国の心映えが漢籍のそれとははるかに異なることを知るべきで、また本文には撰者の個人的見解を混入しなかったことが分かっていよいよ貴いであろう。

◎第40代天武天皇の詔（卓話と重複のため、画像省略）

口語訳：ある時、天皇は詔（ミコトノリ）して、「諸々の家で保有している帝紀（天皇の記録）と本辞（各家の記録）は、もう事実と違って偽りのことも多く付け加えられているようだ。今速やかにその誤りを正さなければ、遠からず真の伝えは失われてしまうだろう。それはつまり国の成り立ちのいきさつ、天皇の治世を広めて行く事業の歴史である。だから今帝紀を選び、古い言い伝えを考察して虚偽を除き真実を選び定めて、後世に伝えたい」とおっしゃいました。

口語訳：そこで阿禮に帝皇日継と昔の言い伝えを暗誦し、学習するようにおせつけられました。

「勅語」とは、天皇が自ら口でおせつけられたことである。「令レ誦=習」とは、旧記の書から離れて、空で暗誦させられ、その語を口に習わしめたのである。このように、すぐに文字に記録するのではなく、まず口に暗誦させられ、よくよく習わせたというのは、言葉付きを重視させられたためである。

◎第43代元明天皇の詔

第43代
元明天皇
(在位707年~715年)

画像引用元：
Wikipedia



口語訳：和銅四年（※711年）の九月十八日、わたくし安萬侶におおせがあり、稗田阿禮がおおせによって暗誦する旧辞を文書に記録して献上せよとのことでした。

天武天皇はそのことを思い立たれてから史書の完成を見ることなく崩御されたということなので、（中略）天武の時に誦み習った帝紀と旧辞は阿禮の口に残ったままだったのを第43代元明天皇がこの時安萬侶朝臣に仰せつけて選録させられたのである。

（中略）また、ここにさえ「勅語の」（※おおせの）とあるからには、元々この勅語は単にこのことを仰せつけられただけでなく、天皇【天武】自らの御口でこの旧辞を暗誦させられ、それを阿禮に聞き取らせ、大御言をそのまま暗誦させ習わせたのかも知れない。（中略）もしそうであったら、この記は天武天皇自ら撰び、暗誦したもうた古語であるということになり、この上なく貴い聖典である。（中略）学問をする人は、頭上に捧げ持って天神地祇の恵み、天武、元明二代の天皇、稗田の老翁、また太安萬侶の恩を決して忘れないようにせよ。



（左）稗田阿礼と（右）太安万侶（画像引用元：Wikipedia）

以上

次回 第392回 移動例会 2024年4月10日（水）
会場：宇和海料理「藝夢」 12:00~14:00